The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アラビア語教育における「音韻規則」の扱いについて
Author(s)	仲尾, 周一郎
Citation	外国語教育のフロンティア. 2019, 2, p. 335-353
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71903
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アラビア語教育における「音韻規則」の扱いについて

How (not) to teach “phonological rules” in Arabic instruction

仲尾　周一郎

要約

アラビア語には、音節構造に関する音韻制約によって引き起こされる、種々の語彙的・後語彙的音韻規則が存在する。つまり、アラビア語学習者は、ある程度こうした「音韻規則」を理解しなければ、アラビア語を正確に発話・作文することはおろか、辞書を引くことも、書かれた文章を流暢に発音することも不可能である。

このため、伝統的なアラビア語教育においてはある種の「（形態）音韻規則」の説明が教育現場で用いられてきたが、それはごく限定的に（パラダイム・レベルで）一般しつつ、そこから演繹的な説明を行うという形での（例えば「CCwという型の語根をもつ動詞に関しては、その三人称単数男性形においてはawa → āのような変化が生じるため、CaCawaではなくCaCāという形式となる」のような記述形式をもつ）。こうした形式での説明は、矛盾を生じにくく網羅的とはなるが、有用な新情報を提供せず、記述が余剰的であるという否定的側面を強くもつ。一方で、近年のコミュニカティブ・アプローチに基づくアラビア語教育では、こうした「音韻規則」を一切廃し、反復練習による「慣れ」で解決される、という方針が採られる傾向が見られる。しかし、こうした方針は非効率であるというだけでなく、学習者が抽象的思考に基づき言語現象を理解する、という（大学等の高等教育機関における）語学学習の一つの学術的意義を損ねてしまう。

本稿は、効果的かつ語学学習に「主体的学習」という意義をもたらす新たなアラビア語教育法を開拓することを目的とし、これまで十分検討されてこなかった、言語学的（現代音韻論的）枠組みを応用した「音韻規則」について検討することを目的とする。

本稿では試験的に、単母音化・短母音化・母音挿入という三つの（パラダイム・レベルを越えて一般化された）音韻規則と、これらについての単母音化→短母音化→母音挿入という規則適用順、および以上の一般化に対する例外現象、という形で一部のアラビア語音韻現象を整理する。この上で、まず学習の初期段階ではごく少数の音韻規則とそれらの適用される順序を（ごく限られた例とともに）導入し、そして学習が進むにつれて以上の規則に関するより詳細な条件や例外現象を導入する（あるいは学習者が主体的に気づくよう促す）という方法を提案する。

キーワード：アラビア語教育、音韻規則、音韻論、主体的学習

1. はじめに[1)]

初・中級のアラビア語学習者が直面する最大の困難としてよく槍玉にあげられる項目として、種々の「音韻規則」（あるいは「音韻制約」）がある。例えば、学習者が (1) のアラビア語文（アラビア文字正書法を転写したもの）に出会ったとする。

(1) *da‘ā ’ismī*.「彼は私の名前を呼んだ。」

この文には二つの内容語 *da‘ā*「彼は呼んだ」、*’ism-*「名前」（代名詞 *-ī*「私の」）が見られる。子音語根順により配列されるアラビア語辞書において、これらの語は「音韻規則」が適用される以前の形式（基底形式）を想定した上で[2)]、それぞれ子音語根 √d‘w、√sm を参照する必要がある。これに加えて、さらにこの文は、流暢な発音では「音韻規則」に基づき /da‘asmī/ と実現する[3)]。つまり、アラビア語学習者はこうした「音韻規則」をある程度理解しなければ、正確に発話・作文することはおろか、辞書を引くことも、流暢に発音することも不可能である。20 世紀後半までのアラビア語教科書においては、パラダイムごとにどういった音韻変化が生じるのかを学習することが当然の前提とされていた。こうしたカリキュラムにおいて、多くの学習者が躓きを感じたであろうことは疑いの余地がない。

これに対し、近年のコミュニカティブ・アプローチ型のアラビア語教科書においては、こうした現象を理論的に理解させるというよりは「口に慣れさせればよい」とする方針が採られ、こうした「音韻規則」を放棄する傾向がある[4)]。こうした方法は、英語のように特定の少数の名詞・動詞が非原則的な屈折をする、というような不規則／例外的現象については妥当であるといえそうである。しかし、アラビア語の「音韻規則」は少なくともパラダイムレベルでは生産的であり、膨大な数に上る動詞パラダイムのタイプを何の指針もなく「ただ覚えよ」と指導するのは極めて非効率である。加えて、こうしたアラビア語固有の特性を単に無視し、英語などの言語と同じ方法で学習すれば事足りると考えるのは抽象的思考を忌避する消極的な方針であり、語学学習の学術的意義を損ねてしまう[5)]。

本稿は、旧来の教育法を批判的に検討しつつ、こうした「音韻規則」を放棄することなく効率的に導入し、かつ大学教育の場にふさわしい積極的な意味を与える方法について、試験的に考察することを目的とする。第 2 節ではまず伝統的アラビア語教育で行われてきた「音韻規則」、および現代音韻論の枠組みで提示されてきたアラビア語「音韻規則」の両方を批判的に検討する。この上で、(i) 伝統的「音韻規則」には積極的な意味を認めがたいこと、(ii) 理論的に整理された音韻規則は効率的なアラビア語教育に資するのみならず、(iii) 言語学的な主題としてのアクティブ・ラーニングへの応用も十分に可能であること、の三点を提案した上で、教育法への応用を見据えたアラビア語音韻規則の整理を行う。続く第3節では、教育法への応用を見据えた例外現象の整理を行う。

2. アラビア語「音韻規則」の概観

2.1 アラビア語教育における二種類の「音韻規則」

いわゆる「アラビア語学／アラビア語言語学」（Arabic linguistics）と呼ばれる研究群には大きく二つの流れがある。第一には中世アラブ地域で興ったアラブ文法学の解釈、およびそれを参照しつつ発展した西欧の東洋学における伝統的文法説明、第二には構造言語学的な理論に基づく解釈と説明に立つものがあげられる。本稿で（括弧つきで）「音韻規則」と呼ぶものにも、これらの流れに沿う二つの分析レベルがある。

第一の分析レベルは、伝統的なアラビア語教育で導入されている。この説明方法は、純粋な音韻規則というよりは規則的な「理想」としてのある種の基底形と、そこからのアドホックな形態音韻変化という説明形式をとる。例えば、20 世紀後半を通じて世界的に利用されたアラビア語教科書 Abboud et al. (1983) では、以下のような説明がなされている（ただし、記述の詳細については省略し、転写・表現を適宜改変している）[6]。

(2) *'al=qurā*「その村」のように語末が *-ā* という形をとる名詞は格変化（主格 *-u*、属格 *-i*、対格 *-a* という格語尾による）しない。これは以下の理由による。例えば、この名詞の語幹 *quray-* に格語尾が付加された場合、*quray-u, quray-i, quray-a* が期待されるが、これらの音連続 ayu, ayi, aya はアラビア語では許されない。そこで、アラビア語の全ての単語に適用される一般的規則に則り、ayV̌ という音連続は自動的に ā となる（つまり *'al=qurayu* → *'al=qurā*）。（Abboud et al. 1983: 14-17）。

同教科書では、この事例に極めて類似した音韻現象を全く別の文脈でも記述している。

(3) 本来であれば CawV̌Ca / CayV̌Ca (3SG.M.PERF) という形が期待される動詞では、awV̌ / ayV̌ → ā という変化が生じ、CV̄Ca という形をとる。例えば 、*nawima* → *nāma*「彼は眠った」、*sayira* → *sāra*「彼は歩いた」、*zawura* → *zāra*「彼は訪れた」（Abboud et al. 1983: 47-49）。

(4) 本来であれば CaCawa / CaCaya（完了形 3SG.M）、yaCCayu（未完了形直説法 3SG.M）、yaCCaya（未完了形接続法 3SG.M.SBJV）という形が期待される動詞は、音韻変化によりそれぞれ CaCā、yaCCā、yaCCā という形をとる。例えば、*da'awa* → *da'ā*「彼は呼んだ」、*banaya* → *banā*「彼は建てた」、*yalqayu* → *yalqā*「彼は得る（直説法）」、*yalqaya* → *yalqā*「彼は得る（接続法）」（Abboud et al. 1983: 130-136）。

同教科書に代表されるような伝統的なアラビア語教科書では、それぞれの名詞・動詞屈折のパラダイムにおける、(2)-(4) 以外の種々の音韻現象を網羅し、種々の人称・数などに

ついてどういった形式が現れるかを記述するに留められ、帰納的推論による一般化が行われない。このため、基本的に説明に矛盾は見いだされない反面、余剰的説明が多く、かつ結果としてはこれらの「音韻規則」の指摘は（「音韻変化」という現象が存在する、という低次の主張自体を除いては）学習者にとって何ら新情報をもたらさないため、創造的な発想に結び付いているとはいえない。従って、こうした形での「音韻規則」の説明はアラビア語教育にとって必要であるとは評価できない。

第二の分析レベルとしては、帰納的推論によって音韻論的に一般化する型の説明がある。例えば、上記 (2)-(4) の音韻現象については、音韻規則の形としてはひとまず (5) のように、かなり単純な形で一般化できる。

(5)　　|aWV̌| → /ā/

こうした音韻論的一般化は、第一の分析と比して高度であり、かつ新情報を提示できる点で有益であり（つまり、教育現場においては学習者の記憶負担を軽減する効果がある）、現代言語学的枠組みにおけるアラビア語研究においては広く支持されている（例えば桑本 1996: 121-123, Voigt 2009 などを参照されたい）にも拘わらず、教科書類においては適切に解説されたものはきわめて稀である[7)]。ただし、これらの規則には、実際には多種多様な例外現象（規則の過剰／過少適用）が伴う。しかし、こうした例外は、管見の限り、言語学的研究において十分には議論されてきておらず、今後の研究の発展が期待される。

さて、本稿の目的は、アラビア語音韻論に関する先行研究のレビューを行ったり、音韻規則に対する例外現象を網羅し統一的な説明を試みることではなく、今後のアラビア語教育への指針を提示することにある。この目的に照らせば、一般化の結果生じる「例外」は、必ずしも学習上の障害となるわけではなく、第一に適切に「例外」を「例外」として覚えさせるという点でより効率的な学習へ、第二に「例外」はいかに説明可能かを（言語学的に）考えさせるという課題解決型学習へとつなげていくことができる、と肯定的に評価することもできるだろう。こうした教育実践は現在まで十分行われてこなかったため、まずは具体的にどういった音韻現象が存在するのか、その現象は規則的か例外的か、その例外は音韻論的に説明可能か困難か、などのデータを提示すことにより、今後の議論の題材を準備する必要がある。

本節の以下では、ひとまずアラビア語の音節構造に関する最も基本的な「音韻規則」として (6) を提示する[8)]。これらは「音韻制約」としては暫定的には (6)' のように示されうる。この上で、複数の音韻規則（音韻制約）がどういった（優先）順で適用されるか、それぞれの規則がどのようなレベルで適用されるか、などの観点から一部の例外現象に対し説明—具体的には、上記の音韻規則が語彙的規則（lexical rule）、つまり語形成に関わる場合に

のみ適用される音韻規則であるか、後語彙的規則（postlexical rule）文を形成する際に語間において適応される音韻規則であるか、あるいはいずれの場合にも適用される循環的な規則であるかなど―を与える。

(6) a. 単母音化規則：|C(V̆)WV| → /CV̄/ or /CV̆W/ (e.g. |CaWV̆| → /Cā/)
b. 母音挿入規則：(i) |%CC| → /%’V̆CC/, (ii) |...C#CC| → /...CV̆#CC/
c. 短母音化規則：|$CV̄C$| → $CV̆C$

(6)’ a. 音節初頭半母音の禁止 (*$WV(C)$) または三重母音の禁止 (*$CVWV(C)$)
b. 音節初頭子音連続の禁止 (*$CC)
c. 超重音節の禁止 (*$CV̄C$)

ただし、本節の以下で述べる音韻論的説明は、全ての例外を説明できるわけではない。続く第3節ではこうした未解決の例外を挙げ、音韻論的説明が不可能であることを示し、部分的に非音韻論的分析の可能性を示唆する。本稿では、言語学的知識をもたずともある程度の理解が可能である生成音韻論的枠組みを用い、最適性理論のような枠組みを用いない。なお、本稿の例としては、便宜上筆者による作例を用いており、逐一出典を示すことはしない。ただし、例は断りがない限り現代語として使用されているものに限っている。

2.1 単母音化規則（語彙的規則）

アラビア語においては、母音・半母音の連続については、/aW/, /ăWā/, /iyă/, /uwă/, /īyV/ (= /iyyV/), /ūwV/ (= /uwwV/), /ayyV/, /awwV/ のみがほぼ完全に安定しており、その他の場合には単純母音（短母音ないし）変化が起こりうる[9]。2.1 節で述べた規則 (5) |aWV̆| → /ā/ については、(2)-(4) で示した事例のほかにも (7) のように受動態・派生動詞の活用にも体系的に適用される。同じ規則は、(8) のように名詞語幹・名詞接辞にも適用される[10]。

(7) a. |(’i)k̲t**ay**a̲r-a| → /’ik̲tā̲ra/「彼は選んだ」
|’alq**ay-a**| → /’alqā̲/「彼は投げた」
b. |ya-k̲t**ayi**r-u| → /yak̲tā̲ru/「彼は選ぶ」
|yu-k̲t**aya**r-u| → /yuk̲tā̲ru/「彼は選ばれる」
|yu-lq**ay-u**| → /yulqā̲/「彼は見つけられる」
c. |muk̲t**ayi**r-u-n| → /muk̲tā̲run/「選んでいる」
|muk̲t**aya**r-u-n| → /muk̲tā̲run/「選ばれている」
|mulq**ay-a**t-u-n| → /mulqā̲tun/「投げられている」

(8)　a. |kubr-**ay-u**| → /kubr**ā**/「最大の (F.SG)」（PL. /kubr**ay**ātun/）
|kasl-**ay-u**| → / kasl**ā**/「怠慢な (F.SG)」（DU. /kasl**ay**āni/）
|**ḏ**ikr**ay-u**| → /**ḏ**ikr**ā**/「記憶 (SG)」（PL. /**ḏ**ikr**ay**ātun/）
|naṣār-**ay-u**| → /naṣār**ā**/「キリスト教徒たち」
b. |j**awa**r-u-n| → /j**ā**run/「隣人 (SG)」（cf. /ji**w**ārun/「近所」）
|s**aya**d-at-u-n| → /s**ā**datun/「男主人たち (PL)」（SG. /sa**yy**idun/）
|fat**ay-a**t-u-n| → /fat**ā**tun/「娘 (SG)」（PL. /fata**y**ātun/）

このほか、ある程度並行的な音韻規則（ある種の母音同化を伴う長母音・二重母音の発生）としては以下 (9)-(10) のようなものが見いだされる[11]。ただし、(9a, b) に示されるように、|uy| については /ī/（名詞語幹）または /ū/（動詞語幹）への二通りの変化が見られる。ただし、(10) は動詞語幹（分詞を含む）についてのみ生じる形態音韻規則である[12]。

(9)　a. **|iw|, |uy|**$_{(a)}$**, |uyu|, |iWu|, |uWĭ|, |iWĭ| → /ī/** (あるいは /iy/)
|j**iw**rān-u-n| → /j**ī**rānun/「隣人たち (PL)」（SG. /jārun/)
|b**uy**ḍ-u-n| → /b**ī**ḍun/「白い (PL)」（SG.M. /'abyaḍ/)
|tamann**uy-u**(=hā)| → /tamann**ī**(=hā)/「（彼女の）願い」
|ya-mš**iy-u**| → /yamš**ī**/「彼は歩く」
|q**uwi**l-a| → /q**ī**la/「それは言われた」
|ta-d'**uw-ī**na| → /tad'**ī**na/「貴女は呼ぶ」
|ta-mš**iy-ī**na| → /tamš**ī**na/「貴女は歩く」
b. **|uy|**$_{(b)}$**, |uwu|, |iWū|, |uWū| → /ū/** (あるいは /uw/)
|s**uy**ṭir-a| → /s**ū**ṭir-a/「それは支配された」
|y**u-y**bis-u| → /y**ū**bisu/「彼は乾かす」
|ya-d'**uw-u**| → /yad'**ū**/「彼は呼ぶ」
|ya-d'**uw-ū**na| → /yad'**ū**na/「彼らは呼ぶ」
|dā'**iw-ū**na| → (|dā'**iy-ū**na | →) /dā'**ū**na/「呼んでいる」
|ya-mš**iy-ū**na| → /yamš**ū**na/「彼らは歩く」

(10)　a. **|WV̆|, |Wū|, |Wī| → /V̄/**[13]
|'a-q**wa**m-a| → /'aq**ā**ma/「彼は立てた、彼は滞在した」
|ya-q**wu**l-u| → /yaq**ū**lu/「彼は言う」
|ya-b**yi**'-u| → /yab**ī**'u/「彼は売る」
|maq**wū**l-u-n| → /maq**ū**lun/「言われている」
|mab**yū**'-u-n| → /mab**ī**'un/「売られている」

b. |**aWū**| → /**aw**/

|ya-lq**aw-ū**(na)| → /yalq**aw**na/「彼らは得る」

|muṣṭaf**ay-ū**na| → /muṣṭaf**aw**(na)/「選ばれている (PL.M.NOM)」

c. |**aWī**| → /**ay**/

|ta-lq**ay-ī**na| → /talq**ay**na/「貴女は得る」

|muṣṭaf**ay-ī**(na)| → /muṣṭaf**ay**(na)/「選ばれている (PL.M.GEN/ACC)」

これらの規則が適用される結果、音節内三重母音および音節初頭半母音が回避されているため、これらの規則はそれらを回避するという、音節構造に関する制約（*$CVWV(C)$, *$WV(C)$）によって生じていると推論できる[14]。例外的に、単母音化規則は (11) のように接語境界には生じない。しかし、この現象は、音韻論的には単母音化規則が語彙的規則であるためであると解釈可能であり、規則の過少適用の事例と考える必要はない。

(11) |’**a=wa**qafa| /’**awa**qafa/ (*/’**ā**qafa/)「彼は立ったか」

|sawf**a ya**qūlu| /sawf**aya**qūlu/ (*/sawf**ā**qūlu/)「彼は言うだろう」

|f**a=wu**jida| /f**awu**jida/ (*/f**ā**jida/)「そしてそれは見つかった」

|b**i=yu**būsatin| /b**iyu**būsatin/ (*/b**ī**būsatin/)「ドライに」

|qa**d wa**ṣala| /qad**wa**ṣala/ (*/qad**ā**ṣala/)「彼は既に到着していた」

|’**a=wa**=ta-šukk-u| /’**awa**tašukku/ (*/’**ā**tašukku/)「よもや疑うのか」

これを支持する事例として、所有を表す1人称接尾代名詞（接語）*=ī* は (12a) のように直前が長母音・二重母音の場合は義務的に *=ya* という異形態をとるが、(12b) に示されるように、それは単母音化規則が適用された後に付加される。その他の語境界で単母音化が適用されない例外は、次節以降で述べる。

(12) a. |‘ayn-ā=ya| /‘aynāya/ (*/‘aynāī/)「私の両目」

|’ilay=ya| /’ilayya/ (*/’ilayī/)「私へ」

b. |‘aṣ**aw-u**| + |=ya| → /‘aṣ**ā**ya/ (*/‘aṣawī/)「私の杖」

|muḥām**iy-u**| + |=ya| → /muḥām**ī**ya/ (*/muḥāmiyī/)「私の弁護士」

2.3 母音挿入規則（後語彙的規則）

アラビア語における語頭の声門閉鎖音＋短母音（/’V̆/）という音連続には、(13a) のように音韻環境によって変化しないもの（*hamzatu l=qaṭ‘i*）、(13b) のように文頭／辞書形式以外では必ず消失するもの（*hamzatu l=waṣli*）の二種が知られる。

(13)　a. /’**i**d̲nun/「許し」　/wa=’**i**d̲nun/「そして許し」
　　/’**u**qbila/「受けられた」　/wa=’**u**qbila/「そして受けられた」
　　/’**a**lmāsun/「金剛石」　/wa=’**a**lmāsun/「そして金剛石」
　　b. /’**i**bnun/「息子」　/wa=bnun/「そして息子」
　　/’**u**ktub/「書け」　/wa=ktub/「そして書け」
　　/’**a**l=bāṣu/「そのバス」　/wa=l=bāṣu/「そしてそのバス」

後者は定冠詞（’*al*=）・少数の名詞・一部の動詞パラダイムに限られている[15)]。アラビア語にはこの現象の結果として、音節初頭／語頭の子音連続は存在しない。このため、主流の分析としては、語頭音削除ではなく、音節初頭／語頭子音連続を回避（*$CC, *%CC）するために音韻規則によって挿入されたものであると解釈されている（桑本 1996: 88-90; Coetzee 2009）[16)]。つまり、(13b) はそれぞれ |bn-u-n| → /’ibnun/、|ktub| → /’uktub/、|l=| → /’al/ という変化が想定される。ただし、/’a/ の挿入は定冠詞のみ、/’u/ の挿入は後続の母音が /ŭ/ の場合であり、その他の場合には /’i/ が挿入されるという相補的な分布が観察される。

文頭以外の環境においては (13b) の /’V/ は挿入されないが、直前が閉音節末子音の場合には、基底において3つの子音が連続することになる（|...C # CC...|）。これを回避するため、その子音の直後に母音が挿入され、音節が形成されなおす（つまり再音節化する）。ただし、この場合挿入される母音は (14) などごく少数の形態素（二／三人称男性複数代名詞・人称接尾辞、男性名詞複数形接尾辞（/’antum/, /=kum/, /-tum/, /hum/, /=hum/, /-w/）、および前置詞 /mud̲/「以来」）の直後では /u/[17)]、その他の場合は (15) のように /i/ となる[18)]。

(14)　|qul-tum # ktub| → /qultum**u**k$tub/「あなた方は書けと言った」
　　|hum # l=‘arab-a| → /hu$m**u**l$‘araba/「彼らアラブ人」
　　|mud̲ # stiqlāl-i=hā| → /mu$d̲**u**s$tiq$lā$li$hā/「その独立以来」
(15)　|‘an # bn-i=hā| → /‘a$n**i**b$ni$hā/「彼女の息子について」
　　|’id̲an # ktub| → /’i$d̲a$n**i**k$tub/「では書け」
　　|rakibat # l=bāṣ-a| → /rakiba$t**i**l$bā$ṣa/「彼女はバスに乗った」

以上のように、母音挿入には生じる環境によって二つの異なる形式が見られるが、相補的な分布をしており、かつ両方とも語彙的に適用される規則であるため、基本的には単一の規則であると考えられそうである。これに対して、2.1 節末尾で述べた通り、単母音化規則は語彙的規則であるため、(16)・(17) では、母音挿入の結果 /aWV̆/ という音連続が生じているが、これらには単母音化規則が適用されない。つまり、これらは音韻規則の性質によって説明可能であり、例外と考える必要はない。

(16) |law # staṭā‘-a| → /l**awi**staṭā‘a/ (*/l**a**staṭā‘a/)「もし彼が能うならば」
|‘ayn-ay # l=bint-i| → /‘ayn**ayi**lbinti/ (*/‘ayn**a**lbinti/)「その娘の両目の (GEN)」

(17) |da‘**aw-ū** # bn=ī| → (|da‘**aw** # bnahā| →) /da‘**awu**bnī/ (*/da‘**a**bnī/)
「彼らは私の息子を呼んだ」
|musṭaf**ay-ū** # l=lāh-i| → (|musṭaf**aw** # llāhi| →) /musṭaf**awu**llāhi/ (*/musṭaf**ā**llāhi/)
「神に選ばれし者たち」
|li=talq**ay-ī** # bn=ī| → (|litalq**ay** # bnahā| →) /litalq**ayi**bnī/ (*/litalq**a**bnī/)
「貴女が私の息子に会えるように」

2.3 短母音化規則（語彙的規則かつ後語彙的規則）

(13b) で述べた、Ø と交替する /’V/ を語頭にもつ形態素の直前に、語末に長母音をもつ語がある（かつその間にポーズが入れられない）場合、その長母音は (18) のように短母音化する。この事実は、(13b) の /’V/ が後語彙的に挿入されるという説明と矛盾せず、2.2 節で述べた諸事例とは相補分布をなしており、母音挿入規則が適用された後に短母音化規則が適用されるという場合は想定されない。

(18) |hādā # l=bayt-u| → /hā$d**a**l$bay$tu/ (*/hād**ā’a**lbaytu/)「この家」
|fī # l=bayt-i| → /f**ī**lbayti/ (*/f**ī’a**lbayti/)「家で」
|mā # sm-u=ka| → /m**a**smuka/ (*/m**ā’i**smuka/)「君の名は何か」

ただし、短母音規則は語彙的規則としての性質も併せもつ。(19) の例は単母音化規則の後に短母音化規則が適用されることを示している。

(19) |fat**ay-u**-n| → (|fat**ā**n| →) /fat**a**n/「男児」
|‘āl**iy-u**-n| → (|‘āl**ī**n| →) /‘āl**i**n/「高い」
|k**tayar**-tu| → (|’ik**tā**rtu| →) /’ik**ta**rtu/「私は選んだ」
|ya-k**tayi**r-na| → (|yak**tā**rna| →) /yak**ta**rna/「彼女らは選ぶ」
|z**uwi**r-tu| → (|z**ī**rtu| →) /z**i**rtu/「私は訪れられた」

また、以下の例が示すように、母音挿入（後語彙的規則）は必ず語彙的規則としての短母音化の後に適用される。つまり、単母音化→短母音化→母音挿入という順でこれらの規則は適用される。(20) は母音挿入→単母音化→短母音化、(21) は単母音化→母音挿入→短母音化、という順で規則が適用されていないことを示している。すなわち、これらの単母音化・母音挿入が生じない事例は、規則の過少適用と考える必要がない、音韻論的に処理

可能な例外であるといえる。

(20)　|k**wa**f| → (|kāf| →) k**a**f「恐れよ (SG.M)」(|kwaf| → *|’ikwaf| → */’ikaf/)
　　|q**wu**l| → (|qūl| →) q**u**l「言え (SG.M)」(|qwul| → *|’uqwul| → */’uqul/)

(21)　|q**wu**l # sm-a=hu| → (|qūl # smahu| → |q**u**l # smahu| →) /q**u**lismahu/
　　(*/qūlismahu/)「彼の名を言え」
　　|da‘**ay-a**t # sm-a=hu| → (|da‘āt # smahu| → |da‘at # smahu| →) /da‘**a**tismahu/
　　(*/da‘ātismahu/)「彼女は彼の名を呼んだ」
　　|fat**ay-u**-n # sm-u=hu| → (|fatān # smuhu| → |fatan # smuhu| →) /fat**a**nismuhu/
　　(*/fatānismuhu/)「…という名の男児」

短母音化規則が適用される結果、アラビア語では長母音の後には音節末子音は現れないため、この規則は超重音節の禁止（*$CV̄C$）という制約によって生じていると解釈できる。

3. 音韻論的説明が困難な例外

3.1 規則の過剰適用

2 節での音韻論的説明に反して、規則が過剰に適用される 3 種の例外が見られる。これらは音韻論的説明が困難であり、別のレベルでの分析が必要となる。

まず、前節で述べた通り、基本的には母音挿入は後語彙的であり、単母音化に先行して適用されない。しかし、(22)・(23) の例では語頭母音（/’V/）挿入後に単母音化が生じている。これらの例についても、語頭に生起している /’V/ は文頭以外では /fa=d‘ī/「ならば呼べ」、/fa=wjal/「ならば恐れよ」のように出現しない[19]。なお、(22) の例はパラダイムレベルで生産的であり、語頭母音の音色は語彙的に決定されている、という説明も妥当ではない。この現象は、音韻論的問題というよりは、ある種のパラダイム・レベリング（e.g. /’**u**k-tub/「書け (SG.M)」：/’**u**ktubī/「書け (SG.F)」＝ /’**u**d‘ū/「呼べ (SG.F)」：/’**u**d‘ī/「呼べ (SG.F)」）として形態論的な説明を必要とする可能性がある。

(22)　|d‘uw-ī| → (|’**u**d‘**u**w-ī| ? →) /’**u**d‘**ī**/ (*/’id‘ī/)「呼べ (SG.F)」
　　|mšiy-ū| → (|’**i**mš**i**y-ū| ? →) /’**i**mš**ū**/ (*/’umšū/)「歩け (PL.M)」
　　|ktuyir-a| → (|’**u**k**u**yir-a | ? →) /’**u**k**ī**ra/ (*/’ikīra/[20])「彼は選ばれた」
(23)　|wjal| → (|’**iw**jal| →) /’**ī**jal/ (*/’iwjal/)「恐れよ (SG.M)」
　　|ymun| → (|’**uy**mun| →) /’**ū**mun/ (*/’uymun/)「幸運たれ (SG.M)」

次に、2 節で述べた通り、語頭の /’V/ 挿入は音節初頭子音連続の禁止（*$CC）、短母音化は超重音節の禁止（*$CV̄C$）によって生じていると考えられる。しかし、定冠詞 /(’a)l=/ の直前では、(24) の例ように、こうした制約に反しないにも関わらず、母音挿入や短母音化が生じる（つまり音韻規則の過剰適用となっている）[21]。例えば、母音挿入は話者が想起する形態素の順を追って線状に適用されているという記述も不可能ではないかもしれないが、説明は困難である（e.g. |%l=bn-u| → |’al=bnu| → /’alibnu/）。

(24) |%l=bn-u| → /**’a**libnu/ (*/libnu/)「その息子」
|fī # l=mtiḥān-i| → /fīlimtiḥāni/ (*/fīlimtiḥāni/)「その試験において」
|‘an # l=mtiḥān-i| → /‘anilimtiḥāni/ (*/‘anlimtiḥāni/)「その試験について」

最後に、末尾に /...aW/ をもつ動詞完了形語幹に対して 3 人称女性双数形主語接尾辞 /-atā/（分析レベルによっては |-at-ā| と二つの接辞に分解することも可能）が付加された場合には、(25a) のように予測不可能な短母音化が生じる。(25b) のように、名詞語幹については同様の環境であっても短母音化は生じない。

(25) a. |da‘**aw-a**t(-)ā| → /da‘**a**tā/ (*/da‘**ā**tā/)「彼女ら二人は呼んだ」（3DU.M. /da‘awā/）
|mašay-at(-)ā| → /mašatā/ (*/mašātā/)「彼女ら二人は歩いた」）（3DU.M. /mašayā/）
b. |ṣaf**aw-a**t-ā(ni)| → /ṣaf**ā**tā(ni)/ (*/ṣaf**a**tā(ni)/)「二つの石」（PL. /ṣafawātun/）
|fat**ay-a**t-ā(ni)| → /fat**ā**tā(ni)/ (*/fat**a**tā(ni)/)「二人の女児」（/fatayā(ni)/「二人の男児」）

この事例も、恐らくある種のパラダイム・レベリング（例えば /katab**at**/「彼女は書いた」: /katab**atā**/「彼女ら二人は書いた」= /da‘**at**/「彼女は呼んだ」: /da‘**atā**/「彼女ら二人は呼んだ」）として説明することが妥当であろう。

3.2 単母音化規則の過少適用

先述の通り、単母音化は語類を問わず適用される一般的な規則であるにも関わらず、一部の環境では適用されない。以下ではいわゆる子音語根のタイプ別に一般化を行う。

まず、ある語が √WCC 型の語根をもつ場合、語根初頭の W に対しては単母音化規則は適用されない。(26a) の事例では接頭辞付加の前に形態論的音交替（metathesis）、すなわち別の形態音韻規則が適用されている。このため、単母音化規則と音交替規則の適用順による音韻論的説明も不可能ではない。これに対し、(26b) に関しては、単母音化は語幹内では生じていないにも関わらず屈折語尾 *-a* に関してのみ生じている（ここでの語形成は [[ta-waffay]-a] のような階層性をもつ）。この例については音韻論的説明は困難である。

(26) a. (|ya-wdad-u| →) |y**awa**ddu| → /y**awa**ddu/ (*/y**ā**ddu/)「彼は愛する」
b. |t**a-wa**ffay-a| /t**awa**ffā/ (*/t**ā**ffā/)「彼は取り立てた、（神が）召した」
|t**u-wu**ffiy-a| /t**uwu**ffiya/ (*/t**u**ffiya/)「彼は（神に）召された、彼は亡くなった」
|t**a-ya**mmum-u-n| /t**aya**mmumun/ (*/t**ā**mmumun/)「タヤンムム（砂による清め）」

この現象に対する別の形での一般化として、「接頭辞 - 語幹間では単母音化規則は適用されない」と記述することも可能である。淺尾 (2016) は通言語的に接頭辞と接尾辞（および前接語と後接語）の非対称的な振る舞いが見られ、特定の音韻規則が接頭辞に対しては適用されにくい傾向があることを示し、心理言語学的説明を行っている[22)]。

次に、ある語が $\sqrt{CW_1W_2}$ 型の語根（ある種の二重弱語根）をもつ場合、W_1 に対しても単母音化は適用されない。(27a) にはいずれも /aWaW-a/ という音連続があり、単母音化規則が二通りに適用されうる。しかし、同規則は語幹内ではなく語幹 - 接尾辞境界においてのみ適用される。仮に、これは音韻規則が適用される方向（例えば「語末から順に適用される」）によって説明することも一応は可能である。また、(27b) は後語彙的規則としての短母音化が生じているが、これまでの音韻論的説明と矛盾しない。さらにこの説明は、√CCW 型語根から派生したIX型動詞 (27c) における単母音化も説明することができる[23)]。

(27) a. |r**aw**a**y-a**| → /r**aw**ā/ (*/r**ā**ya/)「彼は語った」
|ḥ**ay**a**w-a**t-u-n| → /ḥ**ay**ātun/ (*/ḥ**ā**watun/)「生、人生」
|ya-q**w**a**y-u**| → /yaq**w**ā/ (*/yaq**ā**yu/)「彼は強い」
b. |r**aw**a**y-a** # l=qiṣṣat-a| → /r**aw**alqiṣṣata/ (*/r**a**lqiṣṣata/)「彼はお話を語った」
|yaq**w**a**y-u** # bn-u-hā| → /yaq**wa**bnuhā/ (*/yaq**a**bnuhā/)「彼女の息子は強くなる」
c. |r‘**aw**a**w-a**| → (|r‘**aw**a**y-a**| →) /’ir‘aw**ā**/ (*/’ir‘**ā**wa/, */’ir‘awwa/)「彼は懺悔した（√r‘w)」

(28) の例に関しても上記の説明は矛盾しない。ただし、これらの例では語形成の過程で単母音化規則が適用される可能性がある音連続が生じたとしても、同規則は複数回適用されない（つまり非循環的規則である）という説明を要する。

(28) |r**aw**a**y-ū**| → /r**aw**ū/ (*/r**ā**yū/, */r**aw**/)「彼らは語った」
|must**aw**a**y-u**-n| → /must**aw**an/ (*/must**ā**yun/, */must**ā**’un/, */must**a**n/)「水準」
|must**aw**i**y-u**-n| → /must**aw**in/ (*/must**ā**yun/, */must**ā**’un/, */must**a**n/)「平らな」
|l=must**aw**i**y-u**| /’almust**aw**ī/ (*/’almust**ā**yu/, (*/’almust**ā**’u/, */’almust**ay**/)「その平らな」
|ya-r**w**i**y-u**| → /yar**w**ū/ (*/yar**ī**yu/, */yar**ū**/)「彼らは語る」

(29) の例は、以上で見たのと同様の形態素に関わる例であるが、単母音化規則が適用される音連続は一ヶ所に限定されるにも拘わらず適用されていない。つまり (27)-(28) について行った音韻規則が適用される方向性という説明は、これらについては成り立たない。ただし、この事実はこの説明に対する完全な反証と考える必要はない。(29) は (27)・(28) ど同じ形態素であり、例えば、パラダイムを安定させるために音韻規則が適用されていない、という形態論的説明によって補足することもできそうである。

(29) |r**awa**y-ā| /r**awa**yā/ (*/r**ā**yā/)「彼ら二人は語った」
|r**awa**y-tu| /r**awa**ytu/ (*/r**a**ytu/)「私は語った」
|r**uwi**y-a| /r**uwi**ya/ (*/r**ī**ya/)「それは語られた」
|ya-r**wi**y-na| /yar**wī**na/ (*/yar**ī**na/)「彼女らは語る」
|q**awi**y-a| /q**awi**ya/ (*/q**ā**ya/)「彼は強くなった」
|ḥ**aya**w-āt-u-n| /ḥ**aya**wātun/ (*/ḥ**ā**wātun/)「生、人生 (PL)」
|n**awa**w-īy-u-n| /n**awa**wīyun/ (*/n**ā**wīyun/)「核の」
|must**awi**y-a-n| /must**awi**yan/ (*/must**ā**yan/)「平らに」

続いて、√CWC 型語根をもつ語に対しても、(30) のようなごく限られた不連続形態素が関わる場合には単母音化は生じない。これに加え、(31a-b) のように色彩や身体の障害／特徴に関する動詞 (cf. /'aswad-u/「黒い」、/'a'war-u/「盲目の」)、および (31c) のように感嘆文を形成する IV 型動詞 (cf. /ṭawīl-u-n/「長い」、/'aṭwal-u/「より／最も長い」）には（WV → V̄ 型の）単母音化は生じない。つまり、(31) は 'aCCaCu 型の形容詞語幹との類推により生じている過少適用の例と分析することが可能である。

(30) a. /C**aWa**Caan-/ (名詞語幹)
/ḥ**aya**wānun/ (*/ḥ**ā**wānun/)「動物」
/ṭ**aya**rānun/ (*/ṭ**ā**rānun/)「航空」
/j**awa**lānun/ (*/j**ā**lānun/)「放浪」
b. /C**uW**WiC-/ (II 型動詞受動態完了語幹)
/ġ**uy**yira/ (*/ġ**ū**yira/, */ġ**ī**yira/)「それは変えられた」
(31) a. /'as**wa**da/ (*/'as**ā**da/)「彼は黒くした」
/'is**wa**dda/ (*/'is**ā**dda/)「彼は黒くなった」
b. /'**awi**ra/ (*/'**ā**ra/)「彼は隻眼になった」
/'i't**awa**ra/ (*/'i't**ā**ra/)「それは（悪い方向に）変化した」

c. |mā # ’a-t**wa**l-a=hu| → /mā ’at**wa**lahu/「何とそれは長いことか」
|mā # ’a-t**wa**l-a=hu| → /mā ’at**ā**lahu/「何がそれを長めたのか」

その他、以下のような単母音化が語彙的に適用されない動詞語幹がみられる。ただし、(32a) は相互関係に関する動詞であり、(32b) はそれぞれ同じ語根からなる語が規則の適用・不適用によって意味が異なる。これらの観察から、(32) の例外は形態意味論の問題として説明できる可能性がある。ただし、この他にも一般化が困難な例外（例えば /‘**awi**za/「彼は困窮した」）は多数存在する（right 1967, part I: 86-87）。

(32) a. /’izd**awa**ja/ (*/’izd**ā**ja/)「彼は結婚した」
/muzd**awi**j-u-n/ (*/muzd**ā**jun/)「結婚している」
/’i‘t**awa**na/ (*/’i‘t**ā**na/)「それ（ら）は助け合った」
b. /’istaj**wa**ba/「彼は質問した、返答を求めた」vs. /’istaj**ā**ba/「彼は答えた」
/mad**yū**n/「借りられている」vs. /mad**ī**n/「負債を負っている」

名詞語幹（特に複数形）としては、単母音化規則が適用されない /‘**awa**run/「隻眼」、/k**awa**lun/「女々しい」、/k**awa**natun/「裏切り者 (PL)」、/s**uwu**kun/「楊枝 (PL)」、/ġ**uyu**mun/「妬んでいる (PL)」、/ġ**uy**yabun/ ~ /ġ**uy**yābun/「いない (PL)」などの例が散見される。これらについては一般化が困難である。

いわゆる四語根動詞についても /was**wa**sa/「彼はささやいた」、/tabal**wa**ra/「それは結晶化した」のように、一般的に単母音化規則は適用されないようである。

最後に、√CCW 型語根をもつ語に関しては、(33) のように二つの接尾辞が関わる場合を除いては、必ず単母音化規則は適用される。

(33) a. 双数形属格・対格 /-ay(ni)/
/fat**aya**y(ni)/ (*/fat**a**y(ni)/)「二人の男児の／を」
/d**awa**y/ (*/d**a**y/)「～をもつ二つの／を (DU.M)」
b. 動詞強調法 (energetic) /-anna/ (ただし主に古典語で使用される)
/lā tar**ay-a**nna/ (*/lā tar**ā**nna/)「見るなかれ」

3.3 例外的な音色への単母音化

単母音化は同化を伴っており、/uy/ を除いてはどういった母音に変化するかは一意に決定する。しかし、一部のパラダイムに限って、特殊な音色の母音への変化が見られる。これらについても十分な音韻論的説明はなされてきていない。

(34a) については、原則に反し |aWV̆| が /ā/（ないし /a/）に変化していない。一部の先行研究は (35a) のように |aWV̆| の基底アクセント位置によって音色の差異が生じるとする説明を試みている（Voigt 2009）。しかし、この現象はI型動詞に限られたものであり、(35b) のような派生形（VIII型）動詞ではこの変化が生じないことを説明できない[24)]。

(34) a. |q**awa**m-tu| → (|q**ū**m-tu|? →) /q**u**mtu/ (*/q**a**mtu/)「私は立った」
|s**aya**r-tu| → (|s**ī**r-tu|? →) /s**i**rtu/ (*/s**a**rtu/)「私は往った」
|k**awi**f-tu| → (|k**ī**f-tu|? →) /k**i**ftu/ (*/k**a**ftu/)「私は恐れた」
|m**awV̆**t-tu| → (|m**ū**t-tu|? ~ |m**ī**t-tu|? →) /m**i**ttu/ ~ /m**u**ttu/ (*/m**a**ttu/)「私は死んだ」

(35) a. |q**áwa**m-a| → /q**ā**ma/「彼は立った」 vs. |q**awá**m-tu| → /q**u**mtu/「私は立った」
|k**áwi**f-a| → /k**ā**fa/「彼は恐れた」 vs. |k**awí**f-tu| → /k**i**ftu/「私は恐れた」
b. |ḥt**áwa**j-a| → /’iḥt**ā**ja/「彼は必要とした」
|ya-ḥt**áwi**j-tu| → /yaḥt**ā**ju/「彼は必要とする」
|ḥt**awá**j-tu| → /’iḥt**a**jtu/ (*/’iḥt**u**jtu/)「私は必要とした」
|ya-ḥt**awí**j-na| → /yaḥt**a**jna/ (*/yaḥt**i**jna/)「彼女らは必要とする」

また、動詞語幹では |uwu| は一般に /ū/ に変化するが、√CCW 型語根をもつ名詞の ’aC-CuC- 型複数形では、(36) のように |uwu| → /ī/ という変化が生じる。これらの途中段階として |’ad**uyu**n|、|’a‘ṣ**uyu**n| という形式を想定すれば、一応は名詞語幹末で見られる |uy-u| → /ī/ という変化と並行的に捉えられるが、その動機の説明はやや困難である[25)]。

(36) |’adl**uw-u**-n| → (|’adl**ī**n| →) /’adl**i**n/ (*/’adl**u**n/)「バケツ (PL)」(SG. /dalwun/)
|’a‘ṣ**uw-u**-n| → (|’a‘ṣ**ī**n| →) /’a‘ṣ**i**n/ (*/’a‘ṣ**u**n/)「杖 (PL)」(SG. /‘aṣan/, √‘ṣw)

4. おわりに

本稿では、従来のアラビア語教育教科書で採用されてきた「音韻規則」には十分な有用性がないため、教育上導入する必要がなく、代わって言語学的（音韻論的）に整理された「音韻規則」を導入することでより効率かつ主体的な学びが達成されうる、という提案を行った。また、この提案を実践するために必要なアラビア語教育への導入に向けた「音韻規則」の整理（一般化）、およびその例外を試験的に提示した。

おわりに、本稿で整理した音韻規則と例外の導入方法について、以下の 2 点を提案することで締めくくりたい。第 2 節で整理された音韻規則とその適用順（単母音化→短母音化→母音挿入）は簡潔に多くのパラダイムを説明することができるため、最小限の例示を行いつつアラビア語教育の最初期に導入することが望ましい。特に、単母音化規則は個別事

例ごとに補足説明が必要となるものが多いが、それらは学習過程で徐々に細かな導入する（あるいは学習者自身に気づかせる）ことが望ましい。また、その他の音韻論的説明が困難な例外についてもこれと同様に徐々に導入する（学習者に気づかせる）ことが望ましい。

なお、本稿ではこれら例外の理論的説明は行わず、断片的に議論の糸口を試験的に示唆したにすぎない。今後の課題としては、これらが音韻論的に扱われうる主題であるかどうかを含み、意欲的な学習者を巻き込んだ議論を行っていくことが期待される。

注

1) 本稿では断りがない限り「アラビア語」は現代文語／標準アラビア語（Modern Written/Standard Arabic）を指す。アラビア語転写は、*EALL*（Versteegh et al. eds. 2006-2009）の方式に則り、2つの半母音（glide）/y, w/、3つの単母音 /a, i, u/、3つの長母音 /ā, ī, ū/ を認める。ただし、音素論上、長母音 /ī, ū/ はそれぞれ短母音＋半母音 /iy, uw/ と分析することも可能である。なお、辞書形式やアラビア文字表記のラテン文字転写は斜体によって示す。また、| | を非表層（基底）形式、// を表層形式、* を非文法性、√ を子音語根、$ を音節境界、- を接辞境界、= を接語境界、# を語境界、% を文境界、→ を変化（音韻派生）、C を不特定の子音、W を半母音 (/w/ ないし /y/)、V を不特定の母音（V̄ を長母音、V̆ を短母音）を表示する記号として使用する。語形式の注記には、1, 2, 3（人称）、SG/DU/PL/COLL（単数／双数／複数／集合数）、M/F（男性／女性）、NOM/GEN/ACC（主格／属格／対格）を用いる。本稿執筆に際し、アラビア語音韻論に関する多数の資料を提供していただいた桑本裕二氏（鳥取環境大学）には記して謝意を表したい。
2) 具体的には、規則的には */da‘awa/ が期待されるが（cf. /kataba/「彼は書いた」）、音韻規則（|awa| → ā）により /da‘ā/ となっている、形態素 /’ism-/ には /sm-/ という異形態が見られ、前者の語頭 /’i/ は音韻規則により二次的に挿入されたものである、などの分析知識が必要とされる。
3) ここでいう「音韻規則」（つまりサンディ規則／後語彙的音韻規則）はオーラルな言語としての現代標準アラビア語においては随意的規則である。
4) 例えば、世界的に現在最も広く使用されているBrustad et al. (2004) はこの典型例である。
5) 本稿では詳細を割愛するが、外国語学習に関するメタ言語能力育成の重要性については、日本国内では大津由紀夫をはじめとし、（初等・中等）英語教育研究において主張が行われてきた。なお、ヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages）においても複言語能力（plurilinguistic competence）の一環としてのメタ言語能力の重要性は認識されている。
6) こうした説明図式は中世アラブ文法学以来引き継がれてきたものであり、Abboud et al. (1983) 以前に20世紀に版を重ねた教科書（ごく一例としてはBrockelmann 1953、Haywood & Nahmad 1962）も、いずれも少なくとも部分的にはこうした説明を行っている。
7) ごく少数の教科書（例えばBrockelmann 1953）や文法書（Fischer 2002）が「音韻論」として独立の章を設け、種々の音韻規則を例示しているが、事例は主として伝統的枠組みで問題になってきたものに限られ、独自に現代音韻論的検討を経たものとは言えない。
8) この他にも、声門閉鎖音と半母音／長母音の交替（e.g. |āWV| → /ā’V/, |’V’| → /’V̄/）、重子音化（e.g. |...(C_1)$C_2$$\check{V}_1$$C_2$$\check{V}_2$| → /...($C_1$$\check{V}_1$)$C_2$$C_2$$\check{V}_2$/）などの音韻論的に扱われうる問題がある。
9) |-WCiC-| 型の基底語幹を持つ動詞については、|y**a-w**ṣif-u| → /y**a**ṣifu/「彼は描写する」、|y**a-w**hib-u|

→ (|y**a**-hib-u| →) /y**a**habu/「彼は与える」のように /W/ が削除される（cf. 桑本 1996: 118-120）。ただし、これらの動詞の命令形 |wṣif| → /ṣif/「描写せよ (SG.M)」、|whab| → /hab/「与えよ (SG.M)」、および動名詞 /ṣifatun/「描写」、/hiba/「贈り物」においても類似の削除が見られるように、/aW/ という音連続の安定性とは直接関わっていない。また、|yalqay| → /yalqa/「彼は得る」という類似した変化も存在するが、先の説明ではこの現象を並行的に説明できない。

10) また、例えば /‘āl**a**mun/「世界、界 (SG)」（√‘lm）に関連して、/‘a**w**ālimu/「世界、界 (PL)」、/‘u**w**aylimun/「亜界、小世界」、/ta‘a**w**lama/「それはグローバル化した」のような形式が見られる。これを、/kawkabun/「惑星 (SG, √kwkb)」- /kawākibu/「惑星 (PL)」- /kuwaykibun/「小惑星」や /jawharun/「実体（√jwhr)」- /tajawhara/「実体化する」と並行的に捉えると、理論上は /‘**ā**lamun/ の基底に |‘**awV̆**lam-u-n| を想定することもできる。

11) これに加え、その他の半母音が関わる音連続でも、短母音かとは異なるが、以下のような音韻変化が生じる場合がある：(i) |āWV| → /ā’V/、(ii) |iwǎ| → /iyǎ/、(iii) |uyǎ| → /uwǎ/、(iv) |aywV|, |awyV| → /ayyV/、(v) |īwV, ūyV| → īyV。これらのうち、特に (ii)-(v) については異なる前舌／後舌素性の連続を禁止するなどの制約 (/ǔy(V)/, /ĭw(V)/, /yw/, /wy/ など）を別途想定する必要がある（ただし /w/ - /y/ の交替はこれらの音韻環境以外でも体系的に生じる）。また、VIII 型動詞初頭の |VWtaCVC-| は規則的に /VttaCVC/ に変化する（e.g. |wtaḥad-a| → /’ittaḥada/「統一する」、桑本 1996: 118 などを参照）。紙幅の制限上、これらに関する分析は稿を改めたい。

12) (10b-c) については、基底を |aWuw|, |aWiy| とすると、|aWuw| → |āw| → /aw/, |**aWi**y| → |āy| → /ay/ という変化により (5) と並行的に説明可能である。

13) |Wā| → /ā/ のように見える事例として、√CWC 型語根から形成される一部の派生動詞動名詞形では、/Wā/ が期待される形式に対し、/ ā/（例えば */’iq**wā**mun/, /’iq**ā**matun/「滞在」）が現れる。しかし、これは単に音韻論的な問題ではないことが明らかであるため、本稿では扱わない。

14) ただし、(10) の規則は大部分の名詞・形容詞語幹、一部の動詞語幹（3.2 節参照）では適用されないため、これらを回避する音韻制約（*WV, *aWī, *aWū）は強いものとは考えらない（おそらく音韻論的説明が妥当かどうかも批判的に検討される必要がある）。例えば、/’aq**wu**sun/「弓 (PL)」、/’as**wa**du/「黒い」、/bad**wu**n/「遊牧民」、/’af**yū**nun/「阿片」、/ṭ**awī**lun/「長い」、/san**awī**yun/「年の」、/b**uyū**tun/「家 (PL)」、/h**ayū**mun/「当惑している」など。また、一部の形容詞では |CawīC| → /CayyiC/ (e.g. |m**awī**t-u-n| → /m**ayyi**tun/「死んでいる」）という特殊な変化が生じる。

15) /’ismun/「名前」、/’ibnun/「息子」、/’imra’atun/「女」、などのごく少数の基礎語彙、定冠詞 /’al=/、I 型動詞命令形、VII-XV 型動詞の完了形・命令形・動名詞（一部の例外を除く）に限られる。

16) これらの先行研究でも指摘されているよう鬼、この現象はアラビア語に語頭子音連続の禁止 (*$CC) という制約が存在していると想定すると説明がつく。この仮説は、/**’i**sfunjun/「スポンジ」（σπόγγος), /**’a**flāṭūnu/「プラトン」（Πλάτων), /**’u**sṭuqussun/「元素」（στοιχεῖον）など、ギリシャ語などの言語からの借用語・固有名詞において語頭に /’V̆/ が挿入されていることによっても支持される。ただし、これらは文頭以外においても消失はせず、挿入される母音の音色は語彙的に決定されているため、全く同じ音韻現象とはいえない。

17) なお、これらの形態素はいずれも、歴史言語学的に再建される祖形（一部は基底形）においては語末に長母音 /ū/ をもつ。例えば、2PL.M 主語接尾辞 /-tum/ は、目的語接尾代名詞が後続する際には /-tumū/ と交替する（e.g. /da‘aw-**tumū**=hu/「君たちは彼を呼んだ」）。

18) 古期のアラビア語においては、文頭に挿入されるのと同様の母音が挿入されるという変異も見ら

れた。例えば、|qul # nḏurū| → /qul**i**nḏurū/ ~ /qul**u**nḏurū/（Wright 1967, part I: 22）。また、定冠詞に関しても極めて特殊な母音挿入が見られる（註 20 参照）。

19) (23) の例にある語が閉音節末尾の語の直後に現れる場合については、管見の限りアラビア語文法に関する諸文献には具体例が全く挙げられておらず、単母音化（|'iḏan # wjal| → (|'iḏani # wjal| →) /'iḏanījal/?「では恐れよ」）が生じるか否かは不明である（仮に単母音化が生じる場合、それは規則の過剰適用となる）。なお、(23) はいずれも現代語として一般に用いられる語ではなく、一般のアラビア語話者の判断は十分な証拠とはならない。

20) 古期のアラビア語においては /'iḵtīra/ (Wright 1967, part I: 84) という形も見られた。

21) なお、定冠詞に関しては、この他にも極めて個別的な音韻現象が見られる。例えば、その直前かつ極めて限定的な形態素（前置詞 /min/「から」、一人称接尾代名詞 /=(n)ī/「私の（を）」）の直後では、挿入母音 /a/ が生じるという点でも例外的である（e.g. |min # l=bn-i| → /min**a**libni/「その息子から」、|rabb=ī # l='aḏīm-u| → /rabbiy**a**l'aḏīmu/「偉大なる我が主（神）」; cf. |min # bn-i=hā| → /min**i**bnihā/「彼女の息子から」、|ṣadīq=ī # sm-u=hu| → /ṣadīq**i**smuhu/「…という名の私の友人」）。また、定冠詞の /l/ に関しては舌頂音（coronal consonants）の直前において完全逆行同化（e.g. |'al=dalw-u| → /'addalwu/「バケツ」）が生じるが、並行的な同化現象は見られない。

22) この一般化は、で前接語（proclitic）に対し単母音化規則が適用されない例 (11) とも整合する。

23) 現代語では稀にしか用いられないが、|ḥ**waw**a**w-a**| → (|ḥ**waw**a**y-a**| →) /'iḥwaw**ā**/「それは黒褐色になった」という動詞の基底については、三ヶ所に単母音化規則が適用されうる。規則が適用される方向性だけではこの語が */'iḥāwā/ という形をもたないことを説明できない。つまり、例えば単母音化は語形成において一ヶ所しか適用されない、という制限を想定する必要もある。

24) いわゆる「十名詞」（Ten Nouns）と呼ばれる、NOM. /…ū/ - GEN. /…ī/ - ACC. /…ā/ 型語尾屈折をもつ名詞に対し、|'ab**aw-u**-n| → (|'ab**ū**n| →) /'ab**u**n/「父 (NOM)」、|'ab**aw-i**-n| → (|'ab**ī**n| →) /'ab**i**n/「父の (GEN)」のような類似の変化を想定することもできる（cf. /'abaw-āni/「両親」、/'abaw-īyun/「父系の」）。ただしこの場合、同名詞の対格形式に対しては通常の単母音化規則が適用されている（つまり |'ab**aw-a**n| → /'abān/ → /'aban/「父を (ACC)」）ことになり、完全には並行的でない。

25) 実際、これらの複数形の変異形 /'uṣīyun/「杖 (PL)」や /dulīyun/「バケツ (PL)」にも同様に /w/ → /y/ という変化（e.g. |'uṣ**ūw**-u-n| → |'uṣ**ūy**-u-n| → /'uṣ**īy**un/) を想定する必要がある。ただし、|uyu| (|uWu|) → /ī/ という変化自体については、削除される半母音が音色を決定している点で、自然なものとは言えない。仮に |uWu| → /ū/ とした場合、理論上は NOM. /'adlun/ - GEN. /'adlin/ - ACC. /'adluwan/ という形式が期待されるが、こうした格変化はアラビア語には一切見られない。換言すればこの型のパラダイムを排除するため、名詞語幹末 - 主格接尾辞間の |uW-u| は、|iW-u| との類推により、NOM. /…in/ - GEN. /…in/ - ACC. /…iyan/ という語尾形式にとって代わられている（ある種のパラダイム・レベリングが生じている）と説明できる可能性がある。

参考文献

（日本語文献）

浅尾　仁彦

2016　「接辞・接語・複合の左右非対称性―心理言語学的説明に向けて―」『名古屋大学文学部研究論集（文学）』62、141-156。

桑本　裕二

1996　『アラビア語における分節音構造と音節構造の研究』東北大学博士論文、仙台。

（外国語文献）

Abboud, Peter F. and Ernest N. McCarus (eds.)

1983　*Elementary Modern Standard Arabic*, Part 1-2 (3rd ed.). Cambridge University Press, Cambridge.

Brockelmann, Karl

1953　*Arabische Grammatik*, Otto Harrassowitz, Leipzig.

Brustad, Kristen, Mahmoud Al-Batal and Abbas Al-Tonsi

2004-2007　*Al-Kitaab fii Ta^{c}allum al-^{c}Arabiyya with DVD: A Textbook for Beginning Arabic*, Part I-III (2nd ed.), Washington D.C.: Georgetown University Press.

Coetzee, Andries W.

2007　“Hamza” in Versteegh et al (eds.) *EALL*, Vol. II, 228-232.

Haywood, John A. and Hayim M. Nahmad

1965　*A New Arabic Grammar of the Written Language* (2nd ed.), Lund Humpries, London.

Wright, William

1967　*A Grammar of the Arabic Language*, Part I-II (3rd ed.). London: Cambridge University Press.

Versteegh, Kees, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich and Andrzej Zaborski (eds.)

2006-2009　*Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics* (*EALL*), Vols. I-V. Leiden: Brill.

Voigt, Rainer

2009　“Weak Verbs” in Versteegh et al (eds.) *EALL*, Vol. IV, 699-708.